

薩英戦争と鹿児島産業革命遺産

北 隆 志

日本列島の最南端であった薩摩や大隅は、出土する貿易陶器等の遺物や、渡来人の居住に因んだ地名でもわかるように、江戸期初頭まで海外貿易の拠点であった。鎖国体制が確立されてその役割を終えることになったが、その後も薩摩藩では琉球を経由して貿易を続けた。

貿易は、慢性的な財政難に苦しめられていた薩摩藩の重要な財源となり、また、海外の学問や技術の流入と共に、江戸など中央にはわからない海外情勢などを、より早く知る窓口となった。

長く泰平であった江戸幕府の時代も、19世紀になるとロシア、イギリス、アメリカなど外国船が各地に出没し、日本を取り巻く情勢が大きく変化した。やがて幕府が衰微し、日本の体制の転換がなされようとした時、先頭に立った薩摩人は、集成館事業で手に入れた「軍事力」、貿易により培った「外交感覚」、いち早く知り得た海外情勢に基づく「現実」に即した考え方のもとに日本をリードすることになる。

徳川に代わる新政府により、明治という新しい時代が開かれると、日本は世界に類を見ないほどの早さで近代化を成し遂げた。

近代化を成し遂げたその起源は、生麦村殺傷事件が発端になった薩英戦争を契機に、斉彬の集成館事業が再評価され、そこに回帰し、さらに拡充したところにある。

生麦村での殺傷事件はどのようなものであって、薩英戦争が薩摩藩にどのような影響を及ぼしたのか。薩摩藩の外交感覚を巧みに生かした和平交渉が、どのような経緯を辿ったのか。さらに、集成館事業と磯地区の明治日本の産業革命遺産などについて、彼方此方寄り道しながら振り返ってみる。

1 生麦事件

嘉永7年の開国以来混沌とした日本の政治情勢のなか、文久2年、在京の島津久光は、安政の大獄で政治の中心から遠ざけられた改革派の復権等について建言し、これが孝明天皇に受け容れられるところとなった。

無位無冠であった久光は、朝廷の勅使の圧力のもとに幕政改革を行おうと、勅使大原重徳を奉じて江戸に下り、一橋慶喜の将軍後見職や松平春嶽の政事総裁職を認めさせるなど人事改革や制度改革に一定の成果を治めた。

目的を果たした久光は、文久2年8月21日（1862年9月14日）早暁、藩士400人を従え西帰の途についた。

途中鎌倉において、藩祖忠久公の墓参を行うことにしていた久光の行列は、初秋の蒼空の下、川崎宿を過ぎ、浮世絵にも登場する名所の一つ鶴見橋（現鶴見川橋）を渡り、四間程の狭い街道を緩く右に向きを変え生麦村に差し掛かった。行列が生麦村に達したのは午後2時⁽¹⁾を過ぎた頃とされている。

このとき、観光のため川崎大師を訪れようと騎乗にて遠出をしていた4人の英国人も、反対の神奈川方面から生麦村に差し掛かっていた。

上海で生糸の取引と不動産業を営んでいたチャールズ・リチャードソン（29歳）とマーガレット・ボロデル夫人（28歳）が馬頭を並べ、後ろに貿易商のウィリアム・マーシャル（35歳）とアメリカ商社員のウッドソープ・クラーク（28歳）が続いていた。

彼等は生麦村に入ると久光一行に先行する行列から、街道の脇へ寄るよう指図された。これを見て十分に通れると思ったのだろう、さらに一町ほど進んだところで長々と続く行列本隊を目の前にした。

当時の絵図には、狭い街道を両側から挟み込むように茶屋、米、醤油、酒、煙草、荒物などを商う多く家並が描かれている。

彼等は二列になった鉄砲隊の傍らを進み、釣具足、刀箆等の列が過ぎたところで、久光の駕籠前を護衛する30名程の中小姓衆が、街道いっばいに広がって進んで来るのを見た。

日本に来て間もない二人が先頭であったため、二人は目の前に迫る中

(1) 薩英戦争関係資料20頁 鹿児島県立図書館編集

小姓衆に落ち着きを失っていたのかもしれない。行列側を進んでいたリチャードソンは、中小姓に触れることを避けようとしたため、彼の馬体がマーガレットの馬を家並側に押出してしまった。押されたマーガレットの馬は、路側の溝に片足を落とし、驚いて元に戻ろうとして、リチャードソンの馬の前に、前足を踏み出してしまう。これによりリチャードソンは行く手を遮られてしまった。警護の中小姓達は引き返せと手真似を交えて制止したが彼等には通じなかった。その後には久光が乗る駕籠とそれを警護する駕籠廻り続いていた。

久光の駕籠廻りは松方正義（助左衛門）、黒田清隆（了介）、山口金之助、供頭の奈良原喜左衛門などである。

この騒ぎに奈良原喜左衛門は中小姓衆のところに駆けつけ、リチャードソン達に引き返すよう呼び手真似をした。リチャードソンの後ろに続いていたクラークは危険を感じ、引き返すようリチャードソンに声をかけた。

日本に来て間もないリチャードソンの判断の遅れが、悲劇を起こすことになる。引き返すことを決意したりチャードソンは、馬頭を回転させようとするが、中小姓衆の中に馬が入り込み、ますます混乱し、ついに行列が止まってしまうのである。

これを見て奈良原喜左衛門は、無礼者と叫びリチャードソンの左肩下から腹部にかけて斬り裂いた。それを見た中小姓衆の5、6人も、他の3人を囲み一斉に斬りつけた。リチャードソンは傷を負いながらも、もと来た神奈川方向に必死で逃走したが、先にすれ違った鉄砲隊の横を逃走する際に、今度は鉄砲組の久木村治休に斬られている。

リチャードソンは、そこから二町先にある百姓甚五郎の妻ふじが営む掛茶屋附近で力尽きて落馬した。リチャードソンは並木縁に寄りかかり、草をひきむしり創口に押しつけ止血していたが、追ってきた海江田武次等5、6名の藩士に畑に引き込まれとどめを刺された。

一方、マーシャルとクラークは、重傷を負いながらも本覚寺（アメリカ領事館）に辿り着き保護され、神奈川の宗興寺で施療所を開設していたジェームス・カーチス・ヘップバーン⁽²⁾の外科手術を受け事なきを得た。

(2) ヘボンと呼ばれた宣教医、のちにヘボン式ローマ字で知られることになる。

マーガレットは、襲われながらも無傷で横浜居留地まで逃げ帰って事件を報告している。

生麦村に残されたリチャードソンの所へは、事件を知ったイギリス公使館医師ウイリアムが街道を一目散に駆けつけた。現場には既に死亡し、^{よしず}葎をかけられたリチャードソンが横たわっていた。ウイリアムが最も早く現場に着いたといわれている。

このウイリアムは、後に西郷等に招かれ鹿児島医学校長、附属病院長を勤めたウイリアム・ウイルスである。

イギリス公使館の衛兵とフランス衛兵の合同捜索隊が、リチャードソンの遺体を見つけたのは当日の午後5時半⁽³⁾である。遺体は神奈川から海路横浜に送られ、W・G・アスピノール⁽⁴⁾の家に安置された。

殺傷現場は、生麦村字本宮、質屋兼豆腐商を営む村田屋勘左衛門の家の前で、発生直後、村の総代組頭の八郎右衛門から奉行所の定廻り役人に届書が提出された。また、村田屋勘左衛門の家の前では聴取が行われ、勘左衛門の申上書が、名主、年寄連名により報告されている⁽⁵⁾。

久光一行は、宿泊の予定の神奈川宿を素通りし、保土ヶ谷に駕籠をおろした。奈良原と海江田は、横浜の外国人居留地を100人程で襲撃したいと願い出たが、大久保一蔵に諫められている。

また、外国人居留地でも応酬しようとする動きがあったが、薩英互いが自重し事なきを得ている。

事件の翌日8月22日（1863年9月15日）から翌日にかけて、W・G・アスピノール宅行われた検死陪審での証人陳述の記録がある。

左腹部と左背部を斬られて重症を負ったマーシャルの証言⁽⁶⁾を紹介する。

「私達は馬を止めることなく、なおも進みました。道路の左側を進んだのです。行列の中ほどにいる一、二名ほどのサムライと出会うまで何の抵抗にも遭いませんでした。すると男が一人、リチャードソンとボロデール婦人の前に立ちはだかりました。リチャードソンとボロデール婦人の二人が道を塞いでいたのです。リチャードソンは振り向いて、『先

(3) 幕末異人殺傷録151頁 宮永孝

(4) 絹、緑茶の輸出版売英国商人

(5) 国際法から見た幕末外交物語397頁 尾佐竹猛

(6) ザ・ジャパン・ヘラルド1862年9月20日

には進めない』と言いました。クラークは、『先に進まず、わき道に入ろう』といい、私は『どうか面倒だけはごめんだな』と言いました。

私たちの馬が静かに向きを変えると、行列の真ん中にいた男が、羽織をとり、上半身裸になり、刀を抜くと、それを両手で握って構え、リチャードソンに襲い掛りました。私は『逃げろ』と叫びました。しかし、私たちの馬が動き出す前に、リチャードソンは左腕下の脇腹を斬られたのです。大部分のサムライはじっとしておりましたが、5、6名の者が刀を抜くと、道路をふさぎ、先へ行こうとする私たちを襲いかかりました。クラーク氏はサムライ一人を蹄にかけ、私も一人踏みつけました。私たちは全速力で走りました。」英国人側から見た事件発生時の様子である。

奈良原が羽織を脱いでから、リチャードソンたちが逃げ出すまで、恐らく1分なかっただろう。瞬きのような僅かな間の出来事が欧州まで伝わる大事件となった。

この事件が発端となり翌年薩英戦争に発展することになる。

事件は、攘夷のために外国人を斬ったわけではなく、大名行列に対して無礼な振る舞いがあったので咄嗟に斬り捨てたものであったが、結果はあまりにも重大であった。

事件で最初に刀を振るった奈良原喜左衛門清は、3年後京都二本松の薩摩藩邸で病死している。享年35歳、遺体は京都東山即宗院に葬られた。鹿児島市営露重墓地（涙橋）には、遺髪を納めた墓がある。

一説によると、奈良原喜左衛門清の孫とされる山口政雄氏が遺した奈良原喜左衛門伝（私家本）には、「左衛門は病死ではなく、切腹を命ぜられた。江戸品川海晏寺近くの寺において切腹が行われ、介錯は奈良原喜左衛門の弟、喜八郎であった」という⁽⁷⁾。



左：奈良原喜左衛門 右：妻

奈良原に続いてリチャードソンを斬ったとされている久木村治休は、戊辰戦争、西南戦争、日清・日露戦争に従軍し、郷里西国分村浜之市（現

(7) 幕末異人殺傷録208頁 宮永孝

霧島市隼人町)で余生を送っていたが、薩英戦争五十年を迎えての鹿児島新聞の取材を受け、生麦事件の様子を語っている。その様子は、明治45年7月の鹿児島新聞の連載、「五十年前鹿児島湾の激戦」に回顧談として残されている。

また、隼人郷土讀本のなかにも、久木村翁の述懐談として生々しい様子が残されている。

「乗馬姿の四人の夷人が、帽子も取らず行列の横を行きすぎようとした。殊に女夷人が何となく威張っている様に見えて、癪に障りましたが、仕方なく不平を鳴らしながら通り過ぎました。ところが間もなく後ろの方で唯ならぬ心配がしたので、後ろを振り向くと、何やら罵り騒ぐ聲がして、土埃の中に刀がぴかぴか光って見えました。素破『やったな』と思う間もなく、一人の夷人が鞍壺くらつぼに打伏し、左手で脇腹を押さえ、右手で手綱を操りながら、異様な悲鳴をあげ、疾風の様にやって来るではありませんか。他の者もみな口々に罵りながら抜刀しています。丁度私の前に来た時、馬上の夷人目がけて右後方へ一文字に払いました。『がばっ』と確かに手應がして、『ひいっ』という異様な悲鳴をあげて逃げ去りました。」

昭和12年2月、久木村治休は享年95歳で天寿を全うしている。墓は霧島市隼人町住吉共同墓地(濱之市)にある。子孫にあたる方は、鹿児島の短大の教授として若い薩摩人達を育てている。



右：久木村治休

2 薩英戦争

生麦村殺傷事件直後、生麦村の立場茶屋の藤屋伝七方で、中山中左衛門が事情を久光に説明した。久光は事件後も無言で今までと変わらない態度だったという。

しかし、殺傷事件後の久光の対応は早かった。早晩英国の艦隊が鹿児島へ来襲することを予想して、京へ戻る途中の駿河府中から、近習番方松方助左衛門を帰藩させ、藩主茂久(維新後に忠義に改名)に殺傷事件の状況報告と併せて、英国軍艦の来襲に備えるよう指示をしている。

入洛し復命を終えた久光は、9月7日（1862年10月29日）には京都を発ち、大阪藩邸に3日滞在したあと、兵庫から乗船して阿久根に上陸、鹿児島に帰着して直ちに茂久と共に時事を談じた。

藩主をはじめ重役の間では、英国との戦いは避けられないものと考え、諸体制の整備を急いだ。

城下の各組織や各郷警衛地などについての再編・整備、砲台の修築、いち早く情報を伝えるために、山川から谷山等にかけて烽火台を設置した。また、弾薬の増産、海岸にあった食糧倉庫を永吉村に移転し次から次に必要な措置を講じた⁽⁸⁾。さらに、藩主自ら指揮監督をして、英国艦隊の来襲を想定した模擬戦闘なども実施した。

文久3年2月22日（1863年4月9日）の「英国政府の要求について薩摩に諾否を求める親書」が達せられてからは、1,900人規模の川尻砂場場大砲大操練や、5個所の砲台と水軍隊との合同大操練を4月だけでも4回行うなど、頻繁に操練を行った。藩主茂久は、鞭差、羽織、野袴、陣笠姿で大操練には毎回出馬し、薩英戦争が起こる2週間前には、自ら辨天波止砲台において、沖の標的を狙い三十六斤砲及び五十斤砲各5発を試射⁽⁹⁾している。

大操練を続ける一方で、領内の要所の遺漏を点検するため、軍賦役、軍役方書役、郡奉行、火薬局員などを一つの班として四班を編成し、垂水、佐多等の東目海岸、指宿、山川等の西目海岸の各砲台や弾薬の精粗状態を点検した。また、英艦が来そうな沿岸要地では調練を行うなど、10日かけて巡視している⁽¹⁰⁾。この頃になると大操練とは別に、各砲台では1日おき操練が行われ、その命中度は藩主茂久から賞詞を賜るほどであった。

一方横浜では、賠償金支払交渉が難航していたが、殺傷事件後約九ヶ月を経過した文久3年5月9日（1863年6月24日）、ニールは幕府から賠償金10万ポンドを受け取った。

しかしなお、ニールには薩摩藩との問題が残っていた。

今回の交渉で幕府が無力であることを知ったニールは、自ら交渉を行

(8) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻315頁～339頁 鹿児島県

(9) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻383頁 鹿児島県

(10) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻388頁 鹿児島県

うため文久3年6月22日(1863年8月6日)、鹿児島に向けて横浜を発った。

文久3年6月27日(1863年8月11日)午後2時過ぎ、英国艦隊は鹿児島湾口に姿を現した。快晴微風のなか、予て布令のとおり烽火が揚がり号砲が鳴った。

7隻の英国艦隊は、縦列に知林ヶ島沖と小根占⁽¹¹⁾の間をゆっくり鹿児島に向けて北上、途中水深調査をしながら午後7時頃谷山の七ツ島付近に投錨した。マストの英国国旗を確認した郷吏は、直ちに乗艦し来航の仔細を尋ねると、国書を持参している。明日鹿児島において渡すという返事であった。烽火を見た老幼男女は、海岸に出て見物する人で賑わったとある。この日の英国艦隊は変わったことはなく、夕刻になると、艦上では旗艦ユーリアラス号所属の軍楽隊による演奏が始まり、午後10時頃には演奏も終わり静かになった。

明日から交渉をしようとする前夜、艦上の軍楽隊はどのような曲目を演奏したのだろうか。それを解く手掛かりが横浜居留地で発行している新聞ジャパン・ヘラルド紙(1863年9月12日付)にあった。「ユーリアラス号所属軍楽隊による野外演奏会を行う」、との広告記事である。この広告の2日後に、横浜の居留地で演奏会を開いている。プログラムは7曲となっており、1序曲「ウイリアム・テル」、2「第1回十字軍のロンバルディア人たち」、3ワルツ「美しき女性統治者」、4「セヴィリヤの理髪師」、5カドリール「セヴァン川」、6二重奏「ナブッコ」の6曲と、最後の第7曲目にギャロップ「カゴシマ」とある。この「カゴシマ」は、前月の薩英戦争を題材にして作られたと思われる曲で、楽譜は見つかっていないが、ギャロップであることから砲撃音を模した太鼓の音などが随所に聞かれる戦争音楽であっただろうと考えられている。作曲者は、軍楽隊のメンバーのテシーなる人物で、薩英戦争を体験して「カゴシマ」を作曲できたのだろう。一ヶ月後に野外演奏会を控えていたとすれば、七ツ島沖のユーリアラス号の艦上では、「カゴシマ」を除く、横浜での野外演奏会で演奏する予定の「ウイリアム・テル」等6曲を、練習と乗組員の慰労を兼ねて演奏したのではないかと考えられる⁽¹²⁾。

(11) 根占町、現在の南大隅町の一部

(12) 放送大学研究年報第24号70頁 幕末横浜居留地での英仏軍楽隊野外演奏曲目

翌28日（1863年8月12日）朝、七ヶ島を発った英国艦隊は、神瀬と天保山の間を通過し、午前8時半頃前之濱の辨天波止と新波止兩砲台の前面約800Mの位置に投錨した。午前10時、藩は改めて来意を問うために、軍役奉行折田平八、軍賦役伊地知正治、造士館助教今藤新左衛門、庭方重野厚之丞の4名をユーリアラス号に使わした。4人のうちの1人重野は、後に岩下方平と共に和平交渉を行うことになる。渡された国書は、「薩摩公松平修理大夫閣下⁽¹³⁾へ、又留守中ならば、其攝政又は薩摩、日向、大隅、琉球諸島の政府を總理する上官へ」との書き出しで、生麦村の殺傷事件発生以来の経過を述べ、リチャードソン殺害者の審問と処刑を行うこと、リチャードソンの親族と襲撃された他の3名に2万5千ポンドの賠償金の支払を要求した。また、24時間以内に回答することを求め、要求を拒否すれば戦端を開くことになると脅している。

城内にいた藩主茂久は直ちに返書を家老に書かせ、「薩州政府」の名でその日のうちにニールに答書を送った。

「生麦の一件について、申し立てている事柄は手紙の往復ではわからないこともあるので、明日29日（8月13日）正午市街地にある外国人応接館⁽¹⁴⁾で相談したい。ついては、提督及び重役の面々も上陸し、来館願いたい。7隻の軍艦へは、番船を2隻ずつ付けるので、薪水その他希望の品があったら差し上げるつもりである。これはわが薩摩藩の国法であり、便を与えるのは礼儀でもある。上陸については我々が案内をする。六月二十八薩州政府⁽¹⁵⁾」このような答書であった。

実際は、主だった者が上陸して応接館に入ったら門を閉ざして、夜中に寝静まってから殺害するという計画が本田弥右衛門に授けられていたという⁽¹⁶⁾。薩摩藩には、英国側の要求を受け容れる考えは当初からなかったと思われる。生麦村での殺傷事件に対する薩摩藩の考えは、「薩藩は攘夷のために外国人を斬ったのではない。藩の立場からいえば、大名行列に対して日本従来の慣習を無視して、無礼な振る舞いをしたから斬り捨てたものである。これは日本の作法としては、当然の措置である。その賠償金を幕府から得て、尚満足せず、更に薩藩に遺族扶助料を

(13) 薩摩藩主島津茂久、明治になって忠義を名乗る

(14) 御春屋内御客屋 現在の御着屋交番一帯

(15) 近世日本國民史攘夷實行編172頁 徳富猪一郎

(16) 近世日本國民史攘夷實行編173頁本田親雄談話 徳富猪一郎

要求し、濫りに軍艦を差し向けて威嚇する。ここにおいては、開戦は必然の結果にして、我より求めたるものでなく英国より押売したるものだ。」⁽¹⁷⁾ というものであった。このため、答書もごまかしながら、強硬策を目論んだものになっていた。

ニールが薩摩藩の奸計を警戒し、上陸を拒否したので藩は新たな策に転じた。決死隊による英国船の襲撃である。決死隊が英国船に乗り込み将校を殺害すると同時に、波止内に隠し置いた軽舢舨⁽¹⁸⁾ 数隻が乗り出し、7隻の英国船を奪い取るという計画であった。

藩主茂久と国父久光に拝謁を許され、酒杯を賜った決死隊77名は、果物、卵肉等売りに身を糺し、29日午後3時頃（1863年8月13日）、11名を一つの班として、辨天波戸からそれぞれ英国艦隊に向かった。このうち、旗艦ユーリアラス号（3,125排水屯）に向かった町田、江夏らの班のみが答書を持っていると欺いて乗艦できたが、着剣した兵士が面前に整列しており、たとえ襲撃開始の号砲が鳴ったにしても、乗組員600名のユーリアラス号では行動に移せる隙はなかったと思われる。号砲を待ちながら議論を続け、時間を引き延ばすうちに引き揚の合図があり計画は中止となった。

果物、卵肉等売りを偵察と警戒したニールは、前之濱から離れ、交渉のために、ユーリアラス号とパーシェウス号（1,365排水屯）を櫻島横山（袴腰）沖に、残りの5隻は、櫻島小池村沖に碇泊地を移した。

この夜8時頃、折田平八らが再びユーリアラス号を訪れた際ニールは、「敵意を抱くものではないが、明日10時までに解決しないとこのままでは海上封鎖などの実力行使もやむを得ない。」と伝えた。「敵意を抱くものではないが」という表現に、戦闘を考えていないニールが感じ取られる。

翌日の文久3年7月1日（1863年8月14日）9時頃、使者が返書を持参したが、ニールにとって満足するものではなく、一戦交えなければ交渉に応じられないことを使者に伝えた。それでもニールには砲艦外交の延長であったが、薩摩藩は開戦が決定的となったと考えた。

(17) 近世日本國民史攘夷實行編2頁 徳富猪一郎

(18) 小型の大砲を搭載した7名乗船の小型船 鹿児島県史料忠義公史料第二巻342頁 鹿児島県

ニールの最終通告を受けて、藩は英国艦隊の射程範囲から避けるため、午後4時頃本営を西田村の千眼寺に移した。千眼寺の望遠台は常磐山の中腹にあり湾内が一望できるところであったので、本営を置くには最も適していた。千眼寺は、明治の廃仏毀釈により廃寺となり、跡地に戦争の経過と英国艦隊の大敗を刻んだ石碑が残っている。

また、城中においては、火災に備え、御対面所その他御殿内壁や襖等の絵の略写を行い、火防のため予め設けてあった床下の^{あなぐら}箆には帳簿類を取納した。

城下では、上町・下町居住の婦女老幼が山手等へ思い思いに避難し、各寺院は、尊像等を砲弾が届かない草牟田や伊敷方面の寺に移動した。

一方各砲台では、藩の旗章を掲げ、砲ごとに九十発の砲弾を準備し、装薬も済ませ命令が下るのを今や遅しと待っていた。また、遊軍隊は、大門口の塩濱及び砂揚場で英国兵士の上陸に備え、さらにこの夜中、櫻島赤水沖・神瀬間に水雷3個を敷設した。

明けて文久3年7月2日（1863年8月15日）、朝から雲が垂れ込めて、昨夜からの雨混じりの東風はさらに強く、湾内は波頭白馬の如く奔騰という状況であった。前日午後からの晴雨計の降下により、英国艦隊は暴風襲来の前兆を捉え、昨夜のうちにユーリアラス号は袴腰と鹿児島の中間に、他の六隻は小池村の目の前に碇泊地を移していた。

時間の経過と共に風雨は更に勢いを増し、千眼寺も激しい風雨に見舞われていた。そこに危急の報が重富からもたらされた。船奉行添役の五代才助と船長松木弘安が乗船していた薩摩藩の蒸気船、天祐丸、白鳳丸、青鷹丸の3隻が英国側に拿捕されたとの報告である。白鳳丸、青鷹丸はこの4月に購入したばかりであり、青鷹丸は御召船であった。英国側としては、交渉の手段としての捕獲であり、各艦には穏やかに行動するよう指示していたが、天祐丸上では、太鼓役の本田彦次郎が船の引渡しを拒み、抜刀したところを銃で撃たれ、海中に転落するという薩英戦争最初の犠牲者となった。

これらを開戦行為とみなした薩摩藩は、各砲台に掃攘の命を^{そうじょう}くだした。天保山砲台には大久保が命の伝達に向かったが、大久保の姿を見ただけで、点火発砲したという^{そうじょう}仕長鎌田市兵衛の六斤砲が合図となり、各

砲台は一斉に射撃を始めた⁽¹⁹⁾。正午のことである。この時、鹿児島側の砲台の弾着距離内に碇泊していたのは、鹿児島と櫻島の間にあったユーリアラス号とパーシュース号の2隻であった。薩摩藩の突然の攻撃に、ユーリアラス号は一発の弾も撃てなかったのである。

当時外国との決済はメキシコ銀貨で行われており、幕府は英国への賠償金をメキシコ銀貨で支払った。その量は2,000ドル箱で220箱になる。これだけの賠償金を8名しかいない公使館に置くのは危険であるということで、ユーリアラス号に載せることになった。船底の火薬庫前に積み上げた220箱のドル箱を除かなければ、一発の反撃も出来なかったのである。また、パーシュース号は櫻島砲台の存在を確認できていなかったため、砲台の直下に碇泊していた。そこへいきなり弾丸が降ってきて命中し始めたのである。

錨を引き揚げることも出来ず、鎖を切ってその場を逃れたパーシュース号は、薩英戦争で1名が戦死し9名が負傷している。この時の錨は薩摩藩により引き揚げられ、3年後英国公使パークスが鹿児島に来た時に返還されている⁽²⁰⁾。返還せずに鹿児島に残しておけば、観光資源の一つとして大いに役立ったかも知れない。

いきなりの攻撃に後れを取った英国艦隊は、手足まといになる蒸気船3隻を焼却した後、体制を立て直すため北上し、御船明神岬前で旋回、旗艦ユーリアラス号を先頭に、鹿児島湾奥側である北側から南へ単縦陣隊形で侵攻した。

最も北に位置し、最初に攻撃された祇園之洲砲台は、北側に防塁がないのが弱点であった⁽²¹⁾。ここは前之濱側である東南に面して防塁が築かれており、北の祇園之洲砲台から南へ、新波戸砲台⁽²²⁾、辨天波戸砲台⁽²³⁾、南砲台⁽²⁴⁾、大門口砲台、天保山砲台と、前之濱一帯の海上の敵を包み込むように攻撃する構想であったためではないかと思われる。

潮音院岬前（島津重富荘の沖）からの砲撃は、防塁の手薄な方向からの攻撃となり、祇園之洲砲台はたちまち激しい砲火に曝された。規役に

(19) 近世日本国民史攘夷実行編234頁 徳富猪一郎

(20) 鹿児島新聞大正11年5月17日

(21) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻518頁 鹿児島県

(22) いおワールドかごしま水族館西側

(23) ドルフィンボート附近

(24) 辨天波戸砲台の隣の臨時の砲台

あった伍長税所清太篤風は、二十四斤砲の照準を付けようとしたところに、英国艦隊の砲弾が直撃して即死した。全戦闘を通して、砲台での戦死者は税所のみであった。続く各艦の照準も正確で、祇園之洲の砲門は変形して、椿の花のような状態であったと記されている。他の砲台が盛んに砲撃を行うなか、祇園之洲砲台では砲煙が見えなくなったことから、上陸占領されたと勘違いされ、他の部隊が急遽応援に向かっている。

祇園之洲砲台を攻撃した艦隊は、さらに南に侵攻した。東からの暴風雨は単縦陣隊形の艦隊を陸地側に押しやり、また、2番艦パール号以降の艦は、ユーリアラス号に追従することが出来ず、ユーリアラス号1隻のみが新波戸砲台と辨天波戸砲台の正面約700Mの位置に突出した。そこは、英国艦隊が鹿児島湾口に姿を現した日の2日前と、8日前にも合同大操練を行った標的内であったので、たちまち30数門の集中攻撃的となった。ユーリアラス号では、砲弾が中甲板の砲門に命中、兵士7名が戦死し14名が負傷、舷側に大穴をあけた。また、艦側の鋼鉄に命中した弾丸の反響音は砲台まで聞こえたとある。さらに、150ポンド砲（青銅砲）の弾丸は、艦橋で指揮をしていた艦長ジョスリン大佐（37歳）と副長ウイルモット少佐（30歳）を吹き飛ばした⁽²⁵⁾。息もつかせぬほどの攻撃に曝され、瞬く間に10名が死亡、21名が負傷してしまった。

ユーリアラス号から5番目に位置し、上町沖にあったパーシユース号は、ロケット弾による攻撃を行い、一発が上町向築地海岸行屋橋付近にあった薬師忠兵衛門の硫黄倉庫に命中、数千俵あった硫黄に着火した。住人が避難していたため消火する人もなく、火災は強風に煽られ堅馬場に延焼、滑川、浄光明寺にも燃えかかり、上町の大部分が焦土と化した。また、夕方のパーシユース号とハヴォック号の攻撃により、磯の琉球船3隻と和船2隻が焼失、集成館の大砲製造所や鑄銭所などの工場群は、反射炉と溶鋳炉を除いて焼失した。最後尾にあったレースホース号は、機械の故障により自由を欠き、午後3時過ぎ祇園之洲砲台前180Mまで近づき座礁したが、僚艦の曳航作業により午後5時半頃危機を脱している。

戦闘終了後、ユーリアラス号を初めとして、艦隊は皆櫻島小池村沖の錨地に集合した。翌3日（8月16日）、花倉岬沖で11名の水葬を行った。

(25) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻715頁 鹿児島県

ところが、水葬後4、5日すると谷山和田村濱や櫻島に7遺体流れ着いたので、藩はこれらを広小路に晒した後、牛掛灘の刑場に埋葬している⁽²⁶⁾。午前10時からの水葬を終えて、櫻島砲台の慌ただしい修築の動きを見た英国艦隊は、このまま小池村沖に居るのは危険と判断し、最初に投錨した七ツ島沖に移動し船の修理を行うことにした。英国側は、石炭、糧食、弾薬等が不足し、加えて、自ら捕虜となっていた五代と松木から、薩摩藩は英国艦隊の来航を前もって知っていたこと、英国艦隊に対する攻撃の準備を十分に行ったこと、2万人の精鋭がいること、さらに薩藩の戦略等を聞き取り、再度の攻撃を行うことを断念した。後になって英国側は、薩摩藩を再度攻撃するには、1,000人の兵士と、12隻の軍艦が必要だと思ったと述べている⁽²⁷⁾。

最終的に戦死者13名、重軽傷者50名、大破1隻、中破2隻という損害を蒙った英国艦隊は、7月4日（1863年8月17日）午後2時、鹿児島を発って横浜に向かった。なお、故障して小根占沖に1隻残っていたコケット号は、7月6日に迎えに来た1隻とともに夕刻鹿児島を去っている。

文久3年7月11日（1863年8月24日）までに、英国艦隊全部が鹿児島から横浜に到着した。この日、五代と寺島は釈放され上陸している。

薩摩藩では、砲台が打砕かれ、蒸気船は焼失、上町や集成館の工業地帯も焼失しており、敗北と思っていた。ただ、水葬され渚に漂着した敵将たちをみて、敵も多少は損害を蒙ったのだらうと想像していたという。薩摩藩は負けたと悔しがり、英国艦隊も負けたと残念がり、敵も味方も共に負けたと思っていた。そこに横浜から英国艦隊による敗北の報告を聞いて、皆大いに喜び祝杯をあげた。

しかし、藩は英艦の再度襲来を想定し、砲台・備砲の修築強化を急ぎ、焼失した集成館を復興して、昼夜兼行で大小砲の製造に着手、火薬局も大小砲弾の製造に忙殺された。

薩英戦争について、家老川上但馬は次のように感想を述べている。

「此の一戦こそ實に薩摩藩を覚醒せしめたる天來の霹靂であった。英国艦隊の砲力の強大なるを覚り、然も敵の砲丸は圓弾にあらずして長弾

(26) 薩英戦争日乗全15頁

(27) 鹿児島県史料忠義公史料第二巻692頁 鹿児島県

であったのに一驚を喫し、到底薩藩に所有する兵器の如きは彼に優るものにあらざるを知覚した。而して、島津齊彬公以来の國是たりし文明の利器を應用するの必要、また、軍艦を備ふるの急務なるを更に適切に然も實質的に教訓を受けた是薩藩の先覺にあらずして實に日本帝國の文明的進取の先覺なりといふて可なりである。」この戦争は、薩摩に計り知れないほどの教訓を与えたことがわかる。

薩英戦争の後、齊彬の集成事業は再評価され、集成館機械工場、鹿児島紡績所工場、鹿児島紡績所技師館等の建設、また、軍艦や武器の購入、更に海外留学生の派遣など、日本の近代化に向けて第二期集成館事業が始まった。

鹿児島本港に幕末の砲台跡が残っている。いおワールドかごしま水族館手前の石積護岸一帯が新波止砲台と呼ばれた砲台の跡で、薩英戦争の際にイギリス艦隊に激しい砲撃を加えた砲台の一つである。隣の辨天波戸砲台はドルフィンポート附近にあった。



新波戸砲台跡

3 戦後和平交渉

「おんたつも気張ったどん、イギリスのワロどんもつえ（強い）もんじゃ」（私達も頑張ったけど、あの英国の連中もよく頑張った）。

昨日まで敵であった英国艦隊に対する薩摩人の言葉である。変わり身の早さは薩摩人氣質であり、薩摩藩が七百年間続いたのは、時に応じて常に変わり続けたところにある。

そして、古くから海外と交易を行い、海洋国家として開けた薩摩藩の外交感覚は、和平交渉においても終始英国をリードすることになる。

薩摩藩が英国と直接和平交渉を行うことに幕府は難色を示し、なかなか許可をしなかった。このため、薩英が一回目の和平交渉を開始したのは、薩摩の交渉団が横浜に到着してから二ヶ月を過ぎた、文久3年9月28日（1863年11月9日）のことであった。

岩下方平を正使とし、重野安繹は応接係として専ら交渉に当たった。他

に海江田彦之丞、關太郎、南部彌八郎、支藩である佐土原藩からは樺山久舒、能勢二郎右衛門が参加した。幕府は外国方調役、徒目付、通詞が立ち会っている。

正午から始まった交渉の冒頭から、薩摩藩は、生麦事件の犯人の処刑を了承するが、現在なお行方不明であること。また、賠償金は幕府の命に従い諾否を決定すると妥協的な態度を示し、先ずは、薩英戦争の理非曲直を明らかにすべきと主張した。

妥協的な態度を示した薩摩藩の心底は、交渉団の一人高崎猪太郎が長崎から国元の要人中山・大久保への書簡の一節にある。

「今回は大変骨の折れる談判であり、とても厳しい談判になる。国辱とならぬような交渉を行うつもりだが、まずは再度の戦争を避けるために、大変悔しいが情況次第では、賠償金を支払こととしたい。ここは和平交渉をしっかり纏めるべき時である。」このように再度の戦争を避けるため、薩摩藩はどうしても交渉成立を図らなければならなかったのである。

重野は、英国が行った薩摩藩の蒸気船掠奪の不法行為を指摘して、英国側に開戦の責任があると主張した。

一方ニールは、薩摩藩と談判継続中にもかかわらず砲撃を開始したのは甚だ不法である。蒸気船の拿捕は談判の手段の一つであると反論し、正午から四時間ほど交渉を続けたが決着しなかった。

2回目の交渉は10月4日（1863年11月14日）、ニールは、犯人処刑を確約する證書を入れることと、賠償金支払の二箇条を和平条件とし、重野は、英国艦隊の威嚇的態度と蒸気船掠奪の不法行為を指摘して、開戦の責任を呼号した。さらに、重野は、交渉が進まないことを理由に、ロンドンに行き、直接イギリス政府と交渉すると言い始めた⁽²⁸⁾。ニールはこれには困ったようで、自分達が英国政府から全権委任をされていることや、交渉手段として、情況により汽船の捕獲や海上封鎖を実施すべき旨を記した本国からの書簡を取り出し提示している。

双方は自説を固持して譲らず、午後8時まで激論が続いたが決着をみなかった。幕吏の感想に、重野など薩藩側が巧に交渉を進めていたとあ

(28) 鹿児島県史料斉彬公史料第三巻616頁 鹿児島県

る⁽²⁹⁾。

3回目の交渉は翌5日(11月15日)、英国側はクーパー提督も交渉に加わり、薩摩藩側英国側共に相手の責任を主張し譲ることはなく、公使館の応接室は、最早戦闘を再開する外ないという雰囲気であった。

最も困ったのは幕府である。文久3年8月18日の七卿落ち、長州藩と結合した浪士の暴業、横浜鎖港談判など課題が山積している時で、幕府としては、これ以上問題を増やすことは許されない状況であった。幕使は佐土原藩の説得に動いた。もとより佐土原藩は主和論であり、幕府は佐土原藩ともに「幕府は今危急存亡の時にあり、若し再度戦争になると天下の一大事である。朝廷や幕府のためにも一時和合して・・・」などと百方懇請である。

重野は、これを待っていたのかも知れない。「薩藩としては、幕府にそこまで言われると無念だが仕方がないし、藩の面目もたつ。」と説得を聞き入れことになる。それから先の動きは早い。薩摩藩はさらに交渉をリードする。

「万国公法にそういうことがあるかも知れぬが、我々はそのようなものは見たことはない。薩摩藩から見れば、人の所有している船を取つたと思うから発砲した訳である。そちらがそういう言い分があれば、我々もまた言い分がある。して見れば、これは五分五分であるから、この戦争はどちらから兵端を開いたという訳でなくしよう。そちらも船将が戦死し、死傷も多く、船にも損害がでたということが横浜・長崎の新聞に出ている。こちら町などが多く焼けて損害があつた。それは互の事にして、戦争の方は何れも曲直は問うまい。それで宜しいか。」

と言うと、英国側は、それで宜しいという。

「では生麦村での談判に立返ろう。大名の行列を横切った者は斬捨てる。これは日本の法律になっているが、それを外国人は知るまい。犯人を差し出せというが、犯人は出奔して行方が知れないから、捕らえ次第そちらへ引渡す。殺された者の妻子養育料は、もとより遺族救助であるから渡す積もりであった。唯幕府の許しも受けず、濫りに渡すことは出来なかったのである。江戸において渡すということは、鹿児島湾での談判の時も言ったとおり、きちんと払うことにする。それで戦争の曲直も

(29) 近世日本国民史第五十一巻307頁 徳富猪一郎

問わぬことにしよう。』⁽³⁰⁾

重野は、犯人の引き渡しと賠償金の支払いを證書にして英国側に渡すこととし、これと引き替えに、ニールは軍艦購入の斡旋を行うという大まかな取り決めをして、第3回目の交渉を終了した。

ところが、藩内から賠償金支払は、和平交渉の委任外の行為であると異議が生じたのである。重野は英国側に病氣と称して、能勢と共に早駕籠で3日かかって上洛し、久光の指示を仰いだ。久光は、「我を辱めざる以上は、事素より平和に歸せざる可らず。聞くが如くば我に於て損するところなし。而るに猶一審せん」⁽³¹⁾。また、久光は大久保を江戸に向かわせ、老中板倉勝静と賠償金の借用について交渉をさせた。頭を縦に振らない老中に「借用が叶わぬなら交渉は決裂し戦争になる。自分達は自處あらんのみ」と老中の部屋を出ようとした時に呼び止められた。老中は薩摩に折れたのである。

4回目の交渉は、10月29日（1863年12月9日）、11月朔日に佐土原藩の名で賠償金を払い、犯人を捕縛・処刑を確約する證書を渡すということで正式に決定した。その後、軍艦購入周斡旋等について事務上の打ち合わせが行われた。この時重野は、横浜湾上に碇泊していた船を見て、あれが欲しいと言った。5隻有った蒸気船のうち、最も高価であった永平丸は、明石海峡で遭難沈没、天祐丸、白鳳丸、青鷹丸の三隻は今回の戦争で焼失、残ったのは小型の安行丸一隻のみなのである。今や蒸気船は、京や江戸への往復には欠かせないものとなっていて、今そこに碇泊しているあの船がすぐほしいと言いたくなるのも無理のないことである。英国側は、「軍艦は海上の城郭なのでその希望は無理である。船の種類、砲門、トン数等を詳細にして注文してくれることを望む」と重野の要求を断っている。

11月朔日、確約したとおり樺山と能勢は、佐土原藩主島津忠寛の名義で英国側に2万5千ポンドを支払い、岩下と重野の兩人からは、犯人捕縛・処刑を行うとした證書を渡した。

英国側からは、薩摩藩のために軍艦購入の斡旋を約束した證書を渡し、また、留学生派遣のための斡旋を行う事を約束した。

(30) 鹿児島県史料斉彬公史料第三巻615頁 鹿児島県

(31) 近世日本国民史第五十一巻310頁 徳富猪一郎

和平交渉に辣腕をふるった重野（36歳）は、西郷と同様にお庭番を勤めた人で、遠島になった奄美大島で西郷と出会い、西郷に漢詩の手ほどきをしている。維新後は学界に進んだ重野は、日本史上事実と言われていた史伝を次々に否定し、「抹殺博士」と異名をとった。のちに帝国大学文科大学（東京帝国大学文学部）教授に就任している。

講和が結ばれると、英国公使パークスを薩摩に招待し、食事や磯山で狩り等を行い「将来一生の親交を結ばん」と言い、また、英国の政治及び風習の美を斟酌採用すべき旨を論達するなど、薩摩藩と英国は急速に近づき薩英間は大きく発展した。薩摩と英国の友好関係が維新史に大きな影響を及ぼすことになった。

明治43年12月、東京市市谷の自宅において83歳で没した重野の墓碑は、都内の谷中霊園にある。他の墓碑の区画に較べて広い区画となっていて、門柱横には「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」と刻まれた高さ4mほどの石碑が立っている。



正面石畳の先に重野安繹の墓碑

(重野安繹墓碑谷中霊園 撮影唐鎌祐太郎)



門柱の右には石碑撰文は島津重忠
文字は内藤湖南

4 産業革命遺産

1842年、隣国清国がアヘン戦争で敗北すると、欧米列強が通商や開国を求め相次いで薩摩藩領域に来航し、薩摩藩では緊張が一変に高まった。欧米列強の進出に危機感をもっていた島津斉彬は、11代藩主に就任すると、大砲等の材料である鉄を造るための溶鉱炉や反射炉の建設、洋式軍艦や蒸気船の建造、農機具の製造や各種養殖等の振興など、軍備の近代化や産業の育成に積極的に取り組んだ。これが集成館事業である。

集成館事業は、安政5年斉彬が急逝すると、忽ち縮小され、その死を

もって潰えたかみにえた。しかし、これを一変させたのが生麦事件を発端とした薩英戦争であった。英国の軍事力を目のあたりにした薩英戦争の教訓は、斉彬を失った薩摩藩を覚醒させ、工場群を再建するなど、第二期といわれる集成館事業を押し進めた。やがて、明治新政府のなかの薩摩人たちは、薩摩の集成館事業を範として、日本の近代化を図ることとなる。

この度、明治日本の産業革命遺産の構成資産として登録された一連の集成館事業は、旧集成館（反射炉跡、旧集成館機械工場、旧鹿兒島紡績所技師館）、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝である。磯地区は、地上の三つの建物だけではなく、地下の遺構や庭園まで含まれている。

反射炉は1857年に建設され、薩英戦争後に取り壊された。一期集成館事業の頃は、外国語の教本や図面のみで建設に取り組んでいたため苦勞が絶えなかった。湿気のため炉内の温度が上がらず鉄が溶けない。反射炉内の耐火レンガが高温に耐えきれず崩れ落ちる。或いは、炉が傾くなど大変な苦勞を重ねた。蒸気機関の製作や洋式軍艦の造船でも同様に苦勞を重ねた。

現在の旧集成館機械工場は江戸末期の1865年に完成した。日本に現存する洋式石造工場として最も古い建物である。煉瓦に代わり溶結凝灰岩が使用され、ストーンホームと呼ばれた。一期集成館事業の頃は、水力を動力とした木造の工場であったが、薩英戦争後の第二期集成館事業では、現在のような石造りとなり、蒸気機関と水力を動力として稼働した。旧集成館機械工場は、西洋建築の構造理論に基づき建設したというよりは、薩摩の大工や石工が見よう見まねで造り上げた苦心の作である。しかし、日本建築の近代化の第一頁を飾るにふさわしい建築であることは間違いない。

旧鹿兒島紡績所技師館は別名異人館と呼ばれ、洋式紡績工場の建設や技術指導のために招聘した7名の英国人の共同住宅である。江戸期に建築されたもののなかで、木造二階建、四方にベランダを設けたコロニアル様式の建物は、日本ではここ磯だけである。八角形のポーチや回廊など洋風の外観と違い、屋根組は和小屋構造で、寸法は寸尺が使われている。また、引戸の引手位置やドアノブ位置は低い。日本では座って開けるため、西洋もそうだと誤解して低い位置に取り付けたものと思われる。

る。

英国から薩摩に来た7人の英国人は1年間この異人館で過ごし、紡績工場の建設や技術指導を行い英国に帰国した。7人の英国人は工場建設のため全員が英国から来たとされているが、工場建設責任者であったシリングフォードの名前が、横浜の外国人居留地に建築技師シリングフォードとみえることから、鹿児島に来る以前は、横浜の外国人居留地にいたのではないかと思われる。

時代を先行して西洋技術の導入・実用化を図った集成館事業は、西欧諸国と対等な関係を築こうとするためのものであったが、集成館事業で手に入れた日本最高水準の技術力とそれを生かした軍事力は、幕末の歴史の流れを速め近代日本誕生の原動力となった。

今回の明治日本の産業革命遺産の登録は、広範囲に点在する産業遺産に目を向け、その価値と一括登録を提唱した故スチュアート・B・スミス氏が大きく貢献した。また、鹿児島の歴史的財産とその価値を掘り起こし、それを伝えてきた尚古集成館の田村館長や松尾副館長など多くの関係者の努力によりなし得た結果である。この集成館事業が明治日本の産業革命遺産として、世界に知れ渡ることになると、さすがの斉彬や久光・茂久などの名君達も想像はできなかつただろう。

出典・参考文献一覧

- 鹿児島県史料斉彬公史料第三巻 鹿児島県
鹿児島県史料忠義公史料第二巻 鹿児島県
維新史 維新史料編纂事務局
近世日本国民史50巻攘夷実行編 徳富猪一郎
近世日本国民史51巻大和及び生野義舉 徳富猪一郎
続通信全覧 通信全覧編集委員会
武州生麥事變に就いて 大塚武松
文久二年四大事件記念講演集 侯爵西郷家編輯所
生麥事件騒擾記
隼人郷土讀本 隼人町立青年学校
放送大学研究年報第24号
一外交官が見た明治維新 アーネスト・サトウ

想林第7号

ヘボン博士の業績 東京有明医療大学雑誌

生麦事件 吉村昭

幕末に殺された男 宮澤眞一

幕末異人殺傷録 宮永孝

生麦事件血の迷宮 長岡由秀

(元鹿児島県職員)